

FLORA KANAGAWA

OCT. 25. 1981

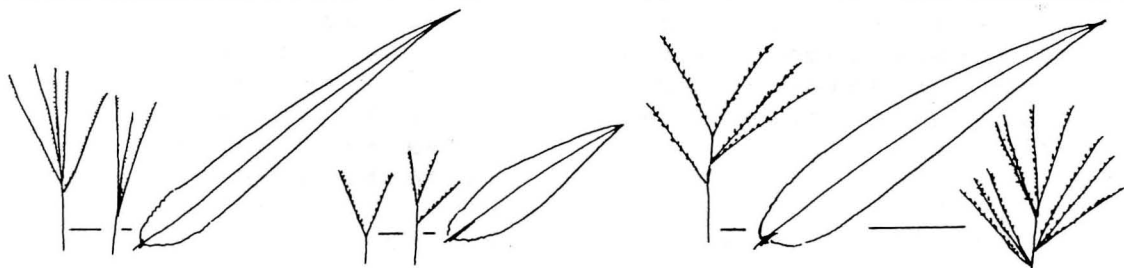
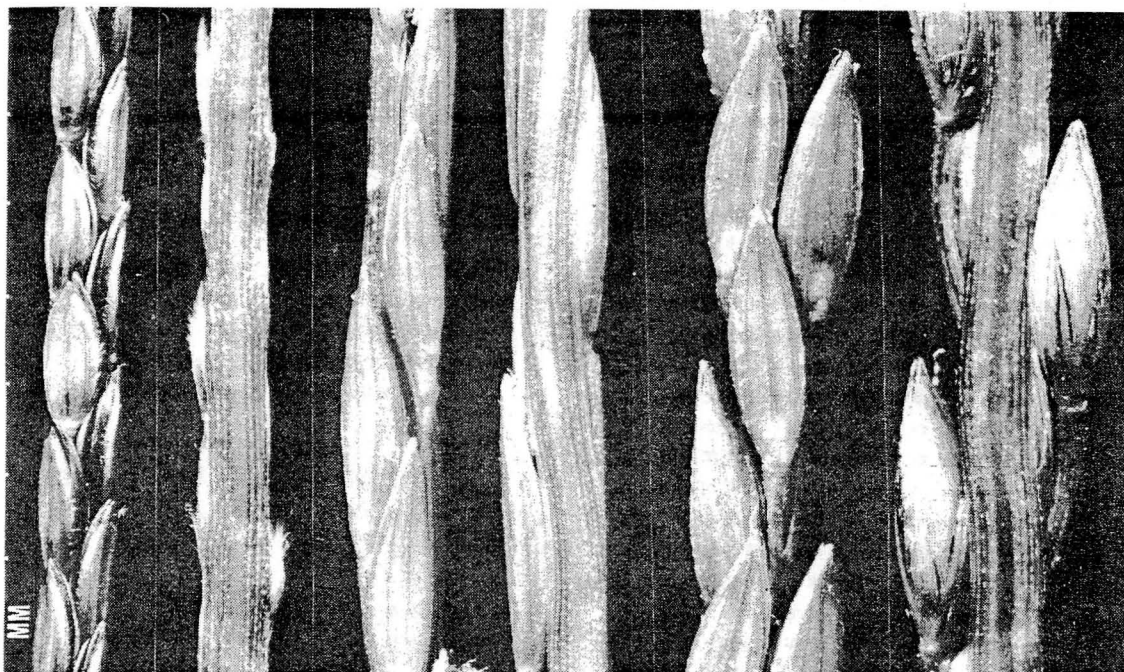
No. 9

神奈川県植物誌調査会ニュース 第9号

231 横浜市中区南仲通り5-60 神奈川県立博物館内

神奈川県植物誌調査会(振替口座 横浜 10195)

TEL 045-201-0926



アキメヒシバ

コメヒシバ

メヒシバ

メヒシバ類

メヒシバの類はごく普通の雑草ですが、よく見ると3種類ほどあります。アキメヒシバははっきりした種類で小穂が短かく円い感じで、軸に強く圧着し、穂が細く見えます。乾いた環境に多く、河原や礫の多い道ばたに生えます。メヒシバは最も普通で変異が多いのですが、これに似たものにコメヒシバがあります。コメヒシバは全体が小さく、横にはう傾向が強く、総の

数も少なく、やせたメヒシバに似ています。小穂の第一穎が発達しないこと、小穂の軸にあまり突起がなく滑らかな感じであることなどで区別できます。また葉が短かく、葉の最も巾の広い所が中央近くにあります。コメヒシバはやや半日かげの所を好みます。メヒシバは到る所に生え変化が多く、時に葉や小穂の毛は変異が多いのですが細かく区分するのは意味がないとする説が有力です。(大場達之)

海老名のタカサゴユリ群生地

相模鉄道の電車が、横浜駅を出てから、あと一分もしないで、海老名駅に到着しようとする、旧海老名駅跡地手前の、国分地区踏切から大和寄りに200メートル程線路沿いを戻ったところでタカサゴユリの咲いているのを発見。あれから6年過ぎました。

私の姉がその近くに住んでいる関係で、その附近の山や、野原を、好きな野草を捜し求めて歩いた或る日、何気なく相鉄線の線路を挟んで、向側の傾斜面を見た時、“あっ”と一瞬目を疑いました。斜面の高いところに群生しているススキの中に、タカサゴユリが咲いていたわけです。それから年々数が増えてゆき、すっかり群生するようになり、シーズンが来ると、朝晩の通勤電車の中からも多くの人達の目を楽しませてくれていました。そして昨年には数百本を数えるまでになりました。場所が相模鉄道の敷地内でもあり、線路でも飛び越さなければタカサゴユリの咲いている場所へは近づけない状態で、電車の往来もあり危険な場所のためか今迄自然に保護されてきたようなものでした。

どうして、このような場所にタカサゴユリが咲いたのか今だにわかりません。唯、今から十年程前に、相模大塚駅から海老名駅に向って復線拡張工事が始まり、この地区は片側の山裾を、削り取って拡張したため、露出した地肌を、牧草の種を吹付ける工事を実施したとかで、その種の中からか、又、他の地区から風に乗って飛んで来たものか、この5・6年の間に素晴らしい群生地となったものであります。この状態が人の口から伝えられ、広まったものか、それが仇となり、少々危険を冒してもと、欲しくなるのが人情でしょうか、取りに来る人が増え、又、終電車が出た後に来る人もあり、その人達は、近くに住む人ではなく、遠くから車でわざわざ来る人達であることがわかりました。

そのため、数百本もあったタカサゴユリもすっかり減り、今年はその清らかな花も見られないのではと心配して居りましたが、高い傾斜面の、手の届かない場所と、今年新しく出た小さなものに、花が咲き始め、八月中旬頃から、近くに住む人や、道行く人の目を楽しませてくれています。

付記 ここでは仮にタカサゴユリの名で書きましたが、いずれ機会を見て標本をつくり、正確な同定をしたいと思っています。

保土ヶ谷区 吉川 アサ子

保土ヶ谷区の便り

8月の中旬から9月にかけての台風15号、19号が持って来た秋が、何やら、朝晩、肌寒く感じさせる今日この頃です。このように秋が駆け足でやってくる年の冬も早いと、年寄達の話に聞いています。

早い秋の気配に急がれてか、保土ヶ谷地区の調査を受持っている、平松さんと私の2人は、9月に入って、最低週に一度は調査に歩こうと、計画を話し合い、早

速実行に移そうと決めました。

今迄は、バス・電車を利用しての採集でしたが、先ずは、周辺の町や野原・山からと言うことで、3回目は朝9時の出発で、初音ヶ丘、法泉町、藤塚町へと調査して行きました。

野も山もすっかり秋への様変わりで、秋草が美しく、ミズヒキ、オオケタデ、ツルボ、センニンソウ、ワレモコウ、シラヤマギク、アザミ、ノダケ等が美しく咲き競い、アケビは数えきれない程の実をつけており、ハイキングのような楽しさも味わいながらの一日でした。

一・二回目の調査をした折に見た、川島町でのコガマ、テンツキ、ヒメテンツキ、チゴザサ、ナキリスグ、アレチウリ、シュロソウ、ヤマホトトギス、フジカンゾウ、ヌスビトハギ、ラセイタソウ、タイアザミ等は見られず、標本にしていないものをと、目をこらして歩きましたが、この日の収穫は、電柱の根もとに生えていたセンナリホウズキをはじめ、トラノオシダ、タマズダレ、キンエノコロ、シオデ、コナラ、クヌギ、ヤブミョウガ、ネバリタデ、カラムシ、アキカラマツ、ウド、ノダケ等でした。

今年の目標は、500種と決めておりましたが、出来た標本の数は400種だけで、目標にはほど遠く、まだまだ頑張らなければと思い、次へのステップとして、秋の野草に一生懸命取り組んでおります。

56年9月17日 保土ヶ谷区 吉川 アサ子

横浜南ブロック野外研修会 三保市民の森附近調査報告 (つづき)

D32 すいかずら科 ウグイスカグラ、ガマズミ、コバノガマズミ、スイカズラ、ニワトコ、ハコネウツギ、ヤブデマリ。

D34 おみなえし科——オトコエシ。

D36 うり科——アマチャズル、カラスウリ。

D37 ききょう科——ツリガネニンジン、ホタルブクロ、ヤマホタルブクロ。

D39 きく科——たんぽぽ亜科、オオジシバリ、オニタビラコ、コウゾリナ、ジシバリ、タビラコ、ムラサキニガナ、ノグシ、ヤクシソウ、ヤマニガナ。

○あざみ族 オケラ、キツネアザミ、タイアザミ。

○こうやほうき族 カシワバハグマ、キッコウハグマ、コウヤボウキ、センボンヤリ。

○おぐるま族 カセンソウ、ガンクビソウ、コヤブタバコ、サジガンクビソウ、ハハコグサ、ヤブタバコ。

○おなもみ族 ブタクサ。

○ひよどりばな族 ヒヨドリバナ、サワヒヨドリ。

○こんぎく族 アレチノギク、アキノキリンソウ、オオアワダチソウ、シラヤマギク、シロヨメナ、ノコンギク、ハルジオン、ヒメジョオン、ヘラバヒメジョオン、ヨメナ。

○さわぎく族 ダントロボギク、フキ、モミジガサ、

○きく族 ヨモギ、リュウノウギク。

○めなもみ族 アメリカセンダングサ、コセンダングサ、ハキダメギク。

付記 前号の目録のなかで記したヤマズメノヒエ、

アカソ、ヤマハコベ、マルバウツギ、ヒメタガソデソウなど、今後検討すべき種類も含まれています。

旭区 岩崎五郎

第3回合同調査会の記録 (県北地区)

1981・7・12

小田急新松田駅に集合し、山北の箒沢から檜洞丸(1,601m)を往復するコースで行なった。県内全域から19名程集まり、遠路参加して頂いた大場達之先生にご指導をいただき、現地案内は県北地区の城川氏と高橋があたった。山頂近辺のバイケイソウの群落はちょうど満開であった。さいわいハコネラン、オノエラン等稀少価値の高い植物を観察することができた。強行なスケジュールにもかかわらず、全員が全コースを踏破して下山することができ、なかには足が棒のようになって帰りの車の中ではぐったりした方もいられたが、次回の合同調査もよろしくお願ひしたい。また調査の記録、足の便などで、並々ならぬご援助を頂いた横浜南ブロックの長谷川義人氏に末筆ながら感謝いたします。

次のリストは長谷川義人氏、城川四郎氏、高橋節郎の記録に基づき作成した。(高橋 節郎)

羊歯植物

トクサ科——スギナ。

ゼンマイ科——ゼンマイ。

イノモトソウ科——イヌシダ、ワラビ、クジャクシダ、オウレンシダ。

オンダ科——ヤマイタチシダ、イヌガンソク、ミヤマワラビ、イヌワラビ、ゲジゲジシダ、ミゾシダ、ヤブソテツ、ヒメワラビ、キヨタキンダ、ヤマイヌワラビ、イノデ、ツヤナシイノデ、オンダ、ミヤマクマワラビ、クマワラビ、ハリガネワラビ、ヘビノネゴザ、ミヤマシケンダ、ジュウモンジシダ。

シシガシラ科——シシガシラ。

チャセンシダ科——イワトラノオ。

ウラボシ科——シノブ、フクロシダ、ミツデウラボシ、ヒメノキシノブ。

裸子植物

イチイ科——カヤ。

マツ科——アカマツ、モミ、ツガ、ハリモミ、ウラボシモミ。

スギ科——スギ(植栽)。

ヒノキ科——ヒノキ(植栽)。

双子葉植物〔雑弁花類〕

ヤナギ科——シバヤナギ、オノエヤナギ、イヌコリヤナギ、バッコヤナギ。

クルミ科——サワグルミ。

カバノキ科——ヤマハンノキ、アカシデ、クマシデ、サワシバ、ツノハシバミ、イヌシデ、ミヤマヤシヤブシ、ヨグソミネバリ。

ブナ科——コナラ、ウラボシガシ、ブナ、アカガシ、ミズナラ、イヌブナ、ツクバネガシ。

ニレ科——ケヤキ、ハルニレ。

クワ科——ヤマグワ、ヒメコウゾ。

イラクサ科——クサコアカソ、ヤブマオ、ウワバミソウ、ヤマミズ、ムカゴイラクサ、アオカラムシ、コアカソ、ミズ、イラクサ。

ウマノスズクサ科——ウマノスズクサ、オオバウマノスズクサ。

タデ科——ミズヒキ、ミヤマタニソバ、イタドリ。

ヒユ科——ヒカゲイノコズチ。

ナデシコ科——ツメクサ、ミミナグサ、ヒゲネワチガイソウ。

フサザクラ科——フサザクラ。

キンボウグ科——センニンソウ、ヤマトリカズト、ウマノアシガタ、ミヤマカラマツ、ヤマオダマキ、ハンショウズル、ボタンズル、クサボタン、コボタンズル、シロバナハンショウズル。

アケビ科——ミツバアケビ、アケビ。

ツツラフジ科——ツツラフジ。

モクレン科——ホウノキ、マツブサ。

クスノキ科——ダンコウバイ、クロモジ、アブラチャン、シロダモ。

ケン科——タケニグサ、ミヤマキケマン。

ベンケイソウ科——マツノハマネングサ。

ユキノシタ科——ヤマネコノメソウ、タマアジサイ、コアジサイ、マルバウツギ、ウツギ、ヤマアジサイ、ダイヤモンドソウ、ハナネコノメソウ、ツルアジサイ、イワガラミ、アカシヨウマ、ヒメウツギ、イワボタン、バイカウツギ、ガクウツギ、ヒトツバシヨウマ、クサアジサイ、フジアカシヨウマ、コガネネコノメ?

バラ科——モミジイチゴ、クサイチゴ、バライチゴ、ノイバラ、ヤマザクラ、シモツケソウ、カナウツギ、ツルキンバイ、シモツケ、ダイコンソウ、ウワミズザクラ、ナナカマド、カジイチゴ、ヤマブキ、オオフジイチゴ、ウシコロシ、ヤブヘビイチゴ、ナンキンナナカマド、ヤマブキシヨウマ、クマイチゴ、マメザクラ、コゴメウツギ。

マメ科——クズ、フジ、ヌスビトハギ、メドハギ、フジカンゾウ、キハギ、ノササゲ、キツネササゲ、ネムノキ、ヤブハギ。

フウロソウ科——ゲンノシヨウコ。

カタバミ科——コミヤマカタバミ、エゾカタバミ。

ミカン科——サンシヨウ、イヌザンシヨウ、カラスザンシヨウ、マツカゼソウ、コクサギ、キハダ、オオバノキハダ、ミヤマシキミ。

トウダイグサ科——アカメガシワ、シラキ。

ウルシ科——ヤマウルシ、ツタウルシ、ヌルデ。

モチノキ科——アオハダ、イヌツゲ。

ニシキギ科——ツリバナ、ツルウメモドキ、ツルマサキ、サワダツ、オニツルウメモドキ、ヒロハツリバナ。

ミツバウツギ科——ミツバウツギ。

カエデ科——イロハモミジ、イタヤカエデ、チドリノキ、ウリカエデ、ホソエカエデ、メグスリノキ、コハウチワカエデ、ミツデカエデ、オニイタヤ、ホソエウリハダカエデ、コミネカエデ、オオモミジ、ウラゲエンコウカエデ、オオイタヤメイゲツ、イトマキイタヤ、ハウチワカエデ、ヒノウチワカエデ、モトゲイタ

ヤ。

アワブキ科——アワブキ、ミヤマホウソウ。

ツリフネソウ科——ツリフネソウ。

クロウメモドキ科——クマヤナギ。

ブドウ科——ノブドウ、エビヅル、ヤマブドウ。

シナノキ科——シナノキ。

マタタビ科——サルナシ、ミヤママタタビ。

ツバキ科——ヒコサンヒメジャラ、ヤブツバキ。

オトギリソウ科——オトギリソウ、コオトギリ、ク

ロテンコオトギリ、トモエソウ。

スマレ科——シコクスミレ、コタチツボスミレ、ク
マルバスミレ、エイザンスミレ。

キブシ科——キブシ。

ジンチョウゲ科——オニシバリ。

グミ科——マメグミ。

アカバナ科——タニタデ、ミズタマソウ、ミヤマタ
ニタデ。

ウコギ科——タラノキ、ウド、コシアブラ、ハリギ
リ、ミヤマウコギ。

セリ科——ミツバ、イワニンジン、シラネセンキュ
ウ、ウマノミツバ、ノチドメ。

ミズキ科——ミズキ、クマノミズキ、ヤマボウシ、
ベニヤマボウシ、ハナイカダ。

〔合弁花類〕

リョウブ科——リョウブ。

イチヤクソウ科——イチヤクソウ、ウメガサソウ、
マルミノギンリョウソウ。

ツツジ科——バイカツツジ、ミツバツツジ、アセビ、
トウゴクミツバツツジ、スノキ、サラサドウダン、イ
ワナンテン、ネジキ、ヤマツツジ、ハナヒリノキ、ジ
ロヤシオ、ゴヨウツツジ。

サクラソウ科——オカトラノオ、ミヤマタゴボウ。

ハイノキ科——タンナサワフタギ。

エゴノキ科——ハクウンボク、エゴノキ、オオバア
サガラ。

モクセイ科——コバノトネリコ、ミヤマイボタ、ア
ラゲアオダモ、マルバアオダモ。

フジウツギ科——フジウツギ。

リンドウ科——リンドウ、ツルリンドウ、センブリ。

キョウチクトウ科——テイカカズラ。

ガガイモ科——オオカモメズル。

クマツヅラ科——クサギ、ムラサキシキブ。

シソ科——ミヤマタムラソウ、キランソウ、イヌト
ウバナ、テンニンソウ、イヌヤマハッカ。

ナス科——イガホウズキ。

ゴマノハグサ科——ハンカイシオガマ、クワガタソ
ウ、ミゾホウズキ。

イワタバコ科——イワタバコ。

ハエドクソウ科——ハエドクソウ、ナガバハエドク
ソウ。

オオバコ科——オオバコ。

アカネ科——アカネ、ヤエムグラ、ヨツバムグラ、
ミヤマムグラ、シロバナイナモリソウ、ツルアリドウ
シ、ヤマムグラ、ヘクソカズラ、オオバナヤエムグラ、
キヌタソウ。

スイカズラ科——コバノガマズミ、ツクバネウツギ、
ニンキウツギ、ニワトコ、キバナウツギ、オオカメノ
キ、ガマズミ、ミヤマガマズミ、ヤブデマリ、ムシカ
リ。

オミナエシ科——キンレイカ、オトコエシ、ツルカ
ノコソウ。

ウリ科——アマチャズル。

キキョウ科——タニギキョウ、ツルニンジン、ヤマ
ホタルブクロ、ホタルブクロ、イワシャジン。

キク科——オニタビラコ、ジシバリ、オヤマボクチ、
ヨモギ、ヒメジオン、サワギク、トゲキクアザミ、コ
ウヤボウキ、ホソエノアザミ、ウスユキソウ、ヤマハ
ハコ、フジアザミ、サガミギク、タテヤマギク、キッ
コウハグマ、アキノキリンソウ、チチコグサモドキ、
マルバダケブキ、ヤクシソウ、ノコンギク、フキ、リ
ュウノウギク、フクオウソウ、ヒレアザミ、ヤバネホ
ウコ、ヤマニガナ、コウモリソウ、ナガバノコウヤボ
ウキ、ミヤマヤブタバコ、ヤマタイミンガサ、テバコ
モミジガサ、オクモミジハグマ、アズマヤマアザミ、
ヒヨドリバナ。

単子葉植物

イネ科——ウラハグサ、ヒメノガリヤス、スズタケ、
チヂミザサ、コチヂミザサ、ホッスガヤ、タンザワザ
サ。

カヤツリグサ科——コカンスゲ、カンスゲ、ミヤマ
カンスゲ、タガネソウ、アブラシバ、ヒメカンスゲ、
イトスゲ、テキリスゲ。

サトイモ科——ホソバテンナンショウ、ミミガタテ
ンナンショウ。

ツユクサ科——ツユクサ。

イグサ科——クサイ。

ユリ科——ヤマユリ、サルトリイバラ、ツクバネソ
ウ、ユキザサ、シオデ、ホソバシオデ、ウバユリ、タ
マガワホトトギス、マイズルソウ、バイケイソウ、イ
ワギボウシ、オオバギボウシ、オオバジャノヒゲ、ホ
ウチャクソウ、エンレイソウ、ホトトギス。

ヤマノイモ科——オニドコロ、タチドコロ、キクバ
ドコロ、ヤマノイモ、ヒメドコロ。

アヤメ科——ヒメジャガ。

ラン科——オノエラン、ハコネラン、ジンバイソウ。

初心者のための標本のつくり方

1. 標本をつくる用具と材料

おし板、吸湿紙、はさみ紙、重し

おし板

押し葉をつくるときに上下の押えに使用する板で2
枚が組みとなる。圧搾板の名で市販もあるが、ベニヤ
板でも充分間に合う。大きさは30×42cm位、厚さは2
cm位のを上下に用いる。

吸湿紙

市販には厚さ1mmと3mmの吸湿紙(27.5×41cm)があ
る。もしなければ新聞紙で代用もできる。20枚の押し
葉をつくるには40枚の吸湿紙が必要である。新聞紙も
吸湿紙もよく乾かして用いる。

はさみ紙

通常は1枚の新聞紙を2つに切って、それを2つ折にして用いる。

重し

重しは、重すぎると植物を押しつぶしてしまい、重すぎてもしわができて、よい標本は作れない。押し板は平均的な重量がかかるように工夫する。市販には、植物圧搾器もあり、ボルトでしめると平均的に圧力が押し葉にかかるようになっている。

一つの方法に底が押し板と同じ大きさの木箱へ砂利を詰めて、重しの代用にしてもよい。また潰物石、敷石など、重さ10-20kgのものを使う。

緩衝材

植物に厚い部分と薄い部分を併有しているものは柔らかいウレタンフォームなどを30×45cm位の大きさに切断して用いる。

標本製作器

少し高価であるが、永田式植物標本製作器が市販されている。毎日吸湿紙をとりかえる手間がはぶけ、短時間で乾燥させるので、変色が少なく、仕上がりが美しい。ものにもよるが、高等植物で2-3時間から1日、海藻標本も1日-4日位ででき上り、1回に30-50枚の標本が作れる。

野外でも電気のあるところならどこでも簡単に利用できるし、折れたんで携行できる軽便標本製作器もあって、最近はかなり普及している。

2. 上手な押し葉(腊葉)のつくり方

① 先ず採集してきたものを泥やごみを落とし、はさみ紙(新聞紙を用い、必ず半分に切る。)に1種ずつはさみ込む。野冊にははさんで持ってきたものは、そのままはさみ紙として使用し交換はしない。

② 忘れないうちに、採集地、採集年月日、採集者、花の色、生育環境などを観察したメモをはさみ紙の間へ入れるか、新聞紙の外側の下端へ記入する。電気乾燥器を用いる場合、葉の裏面の粉白を帯びたものが失われてしまうので、葉の裏の記述も忘れないように。採集地不明の標本は無価値に等しく、後でラベルを記入しようと思っているうちに忘れてしまったり、採集品が増えてくると思わぬ誤まりを起しかねないので、これだけは必ず実施する。

③ 一番下へ押し板をおき、次に吸湿紙(又は新聞紙の厚いもの)、はさみ紙、吸湿紙……の順で重ねていく。量が多くて厚くなった場合は中間の適当な所へ薄い(ベニヤ程度の)板を入れる。最上部へ押し板を乗せ、重しをして1日目は完了。

④ 翌日から1日1回(最初はぬれ具合によって1日2回)ぐらいのペースで、吸湿紙だけをよく乾燥したものと取りかえる。はさみ紙は交換しない。

⑤ 押しして2日目ぐらいにくせなおしをする。くせなおしというのは、葉の裏表や不自然な茎の折れ曲り、ちぢれやはさみ紙からはみ出しなどを直すことである。

⑥ こうして押し葉ができあがるまで吸湿紙をとりかえる。種類によって時間の違いはあるが、1週間-2週間で標本ができあがる。乾いたかどうか葉を折り曲げてみて、折れるようだったら完成である。

⑦ できあがった標本はチャック付ポリ袋に防虫剤を入れて保存する、チャック付ポリ袋はセイニチのユニバック(製造元生産日本社)のL-4(480×340×0.04)、防虫剤はナフタリン、パラジクロベンゼンなどがよい。いずれも事務局で用意しましたから請求して下さい。

以上一般的な押し葉のでき上るまでを記したが、種類によっては茎や葉の厚いもの、大きいもの、乾きにくいものなど変化が多く一様でないので、次にそれらを取りあげて記してみる。

3. 押し葉(腊葉)のつくりにくい植物

多肉な植物——ベンケイソウ科、スベリヒユ科、ヤドリギ科、サトイモ科、ユリ科、ツクサ科、ヒガンバナ科——など多肉で乾燥しにくいものは押ししている間に変色したりときに新芽を出すものもあって、採集した時とかなり形が違ってしまふものがある。このような種類は一般的な方法では標本はつくりにくいのでいったん殺してから押し葉にするが、これには次の方法が考えられる。

一つは熱湯に入れておくか、又はその中で1-2分間煮沸した後水気をきってから押し葉にする。又、アルコール(5-10%)又はホルマリン(2-5%)液に、一昼夜、又は2昼夜つけておいた後に押し葉にする方法もある。その他、標本製作器を用い、高温で急速に乾燥させてもよい。

多肉な部分と薄い部分を有するもの、例えばサトイモ科は押し前に茎と偽茎(地下の肥厚した部分)を刃物で半分にさいて中の芯の部分を除き薄くしてから押しすとよい。

アザミの類、ヒゴタイの類はあまり強く押し過ぎると頭花の形がくずれてしまうので吸湿紙と吸湿紙の間へ緩衝材(ウレタンフォーム、スポンジなど)を入れる。

1枚のはさみ紙に入らぬような大型のものは切断して2-3枚の続き標本とし、a, b, c, 又は1, 2, 3, 等と符号をつけて同一個体であることを記す。

永田式植物標本製作器

実用新案登録 第 1020499 号

永田式植物標本製作器 101

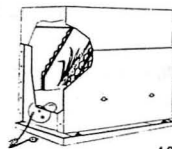
¥50,000 (送料共)

昭和35年以来今日迄非常に沢山の専門家、そうでない方にお使いいただき全く便利で重宝だともうこんでらっしゃる型です。60Wのヒヨコ電球2ヶを使っているだけで、安全に設計してありますので過熱などの心配もなく、振動もなく、ごく僅かな電気代だけで薬品などの消耗品は全く不要です。

内容

ジュラルミン製外箱1ヶ、中枠1ヶ、蓋1ヶ、枕2ヶ、ストッパー2本、電球装着体1組、ヒヨコ電球60W 2ヶ、アルミ波板20枚、段ボール板20枚、ベニヤ当板2枚、ゴム紐2本、携帯用紐1本。附属品一切が外箱内に納まりますので蓋をして紐掛けをして下されば全重量が僅か10kgで寸法も45×20×40cm(高さ)ですから片手で軽く持ち運びが出来ます。

能力 普通のおおきさ(新聞紙4つ折)のおしばが1回に30-50枚作れます。



101

○ナシ、リンゴ、ボケなど大形の果実は液浸標本として保存もできるが芯を中心にして薄く切り押し葉にすることもできる。また美しい果実の色と形や、何年に1回しか開花しないランの花などを永く保存し、展示に用いる場合は、県立博物館で展示しているような模型にして保存することもできる。

○タケ、ササの葉は乾くとまき易いから標本にする前に水に浸して元にもどしてから押す。直ちに押すことができない場合も乾燥標本にしておいて同様に水に浸して葉を復元してから押すように。

○マツ、ツガ、モミなど針葉樹の葉を落さぬように標本をつくることは、先ず至難のわざであり、落ちた葉は袋、又は包み紙などに入れて保存し、枝だけになったものに添えておく。ワセオバナ、マコモなども同様に花が全部落ちてしまうので、同様な方法で標本をつくる。
(高橋秀男)

5. 植物名はわかる範囲内で結構です。わからないものも提出して下さい。
6. まぎらわしい種は同定の根拠、花の色などを備考欄に書いて下さい。
7. 標本は泥を落とし、同定するに足りる程度の量にして下さい。
8. 地区内での重複をさけるため、地区内相互の連絡を密にして下さい。

植物誌調査会名簿の追加

鎌倉・三浦地区

湘南地区

横浜北・川崎地区

横浜南地区

県央地区

ラベルの見本と記入例	
神奈川県植物誌標本	
No.	Fam.No.
市.区.町.村 藤野町	採集地コード FUJ-1
学名・和名	
<i>Plantago asiatica</i> L.	
オオバコ	*学名, 和名の不明なものは記入しなくてもよい。
同定者	同定年月日
メッシュ内の地名 落合	ゴム印の場合 西暦日付5号
採集年月日 JUN. 24, 1981	
採集者	
備考	花や葉の色, 咲き方, 生育量, 環境など気づいたことを記入する。

標本採集に当ってお願い

標本のつくり方の項で詳しく述べましたので、重複するようですが、次の事項は必ず守って実施して下さい。

1. 標本は同定に足りるもの、すなわち花や果実等のついているものを採集して下さい。樹木の場合は花や果実は必ずしもなくてもよいが、ひこばえをとらないようにして下さい。
2. 「神奈川県植物誌標本」ラベルには必要事項を記入して下さい。ラベルは事務局にありますから請求して下さい。
3. 新聞紙は必ず半分に切り、標本を一枚の紙にはさんで下さい。
4. 新聞紙外側の下端に、採集地コード(TO-3など)植物名を書いて下さい。(横浜・川崎地区の方は右端に植物番号(B-10, C-20など)も書いて下さい。)

名簿の追加はアンケート調査にもとづいておこなっていますので、未提出の方は至急お送り下さい。なお都合で退会される方もよろしくお祈いします。

住所変更